

縁と縁をつなぐ被災地訪問

台湾新故郷及び被災地市民交流会、東日本被災地を訪ねる

7月20日から7月24日にかけて、台湾の新故郷文教基金会の廖嘉展さん、顔新珠さん、及び神戸の被災地市民交流会のメンバーが、東日本大震災の被災地を訪問しました。たかとり教会のペーパードームを台湾の被災地・桃米村へ移設するプロジェクトで中心的な役割を果たした、台湾・新故郷文教基金会のお二人が、今回、日月潭観光船業者のチャリティ義援金を松島町にお渡しすることに合わせ、神戸の被災地市民交流会と共に、東日本の被災地を訪問させていただくものです。これまで神戸、台湾、中越などの被災地交流で育った様々な縁と縁をつなぐ訪問になりました。そして、今回の訪問を通して、多くの新しい出会いが生まれました。

主な訪問地は図の通りです。

また、訪問メンバーは下記の通りです。



◆台湾

廖嘉展（リャオ・ジャーザン） 新故郷文教基金会董事長
顔新珠（イエン・シンジュ） 新故郷文教基金会執行長

◆日本（被災地市民交流会）順不同・部分的な参加も含む

神田 裕 たかとりコミュニティセンター
河合節二 神戸市野田北ふるさとネット
垂水英司 東アジアまちづくり研究会
石井 修 神戸市教育委員会学校整備課
福留邦洋 新潟大学災害復興科学センター
若生麻衣 京都市市民活動総合センター
秋原雅人（鄧奕） ひょうご震災記念21世紀研究機構

寸暇もない多忙な時期に対応して下さった、現地の皆さまに深く感謝の意を表します。

「長洞の〈かえる〉を見つけて、ぜひ伺います」

7月21日 陸前高田市長洞地区

まず、向かったのは陸前高田市広田町長洞地区。実は、長洞地区の自治会副会長の村上さんと新故郷の廖さんは、6月26日放送のNHK衛星番組「地球アゴラ」（地域リーダーと復興）で共に出演した仲。そこで、廖さんが来日するとあって、ぜひ会いたい、ぜひ訪れたいということになった。集落内に建設された仮設住宅「元気村」の前で、私たちのバスを今か今かと、村上さんをはじめ村の方が迎えてくださった。バスから降りると、二人はがっちり握手。早速仮設の集会所で懇談が始まった。



熱烈歓迎のチラシが貼られている

長洞集落は約60戸、200人ばかりの小さな集落だ。今回の津波でおよそ半数の28戸の人たちが家を失った。そこで長洞の人たちは地主に掛け合って土地を手当てし、仮設住宅の建設にこぎつけた。しかし、仮設住宅は抽選が原則だ。長洞地区を支援している仮設市街地研究会（東京）のアドバイスもあって、村の人たちが一緒に入れるように役所に交渉した。その結果、ほぼ全員が入居できることになった。元気村は17日に開村式が終り、新しい生活が始まったばかりだ。



桃米のまちづくりを説明する顔さん

村上さんから長洞の被災状況や壊滅状態となった陸前高田市の様子などを説明する。長洞集落はワカメやアワビの養殖など漁業が中心の村だが、船や養殖の施設など津波ですべて流された。高齢者も多く、再開には多くの課題があるという。厳しい被災状況を目の当たりにした廖さん達も、さすがに言葉が見つからない。

そこで新故郷の顔さんからパワーポイントを使って、桃米の復興村づくりの様子を説明した。自然環境以外何も目立ったものがない桃米、震災で大きな被害を受けた。何もないことを逆手にとって、「かえる」に代表される自然を主役にして村づくりを進めている。そうした様子に、長洞の人々も共感できたようだ。

終わり際に廖さんから桃米村の蛙のマスコットを贈呈し、「落ち着いたら、ぜひ桃米に来て下さい」との誘いに、村上さんは「長洞の〈かえる〉を見つけて、ぜひ伺います」と応えた。その後、村の状況を案内してもらってから、再会を約して長洞を後にした。



桃米のマスコットをプレゼントする廖さん

「来る人を拒まず」…番屋プロジェクト 7月21日 南三陸町志津川

次の訪問地は、南三陸町志津川の「番屋プロジェクト」。「番屋」は、津波で何もかも失ったが、「もう一度海に出たい」と意気込む若い漁師たちの作戦拠点、集まり場になっているところだ。野田北部の河合さんももう2度ほど訪れている。途中、気仙沼などの被災地を通りながら、下車することなく目的地へ急いだ。志津川漁港の近く、津波に流され周り一帯荒野のような場所にポツンと佇む番屋にたどり着いたのは、もう夕暮れ間近だった。



若い漁師たちの集まり場になっている番屋

番屋に集うグループの代表は、震災前しづがわ牡蠣工房などを営んでいた有限会社大清の社長工藤忠清さんだ。家も工場も完ぺきに流された。被災前一緒に働いていた漁師仲間たちが集まり、再興を目指す拠点が欲しいと工藤氏は考えていた。その思いが宮城大学の竹内先生につながった。宮城大学をはじめとする有志60名の尽力で完成したのがこの番屋だ。そこに20代から50代の若い漁師が集まってきた。そして、メンバー一丸での活動が始まったのだ。

工藤さんは、私たちを見るなり、「今日は獲れた魚でパーティをしたいと思っていたが、台風の影響で無理。だから、登米まで行って焼き肉で語りましょう」と、いきなり明るい歓迎の言葉で迎えてくれる。「来る人を拒まず」…これは、工藤氏がその日何度も口にした言葉だ。被災地へ来たというより、元気をもらいに来た。これは終始一貫して私たちが受けた実感だ。

とりあえず、番屋の中へ。工藤さんや数名のメンバーと私たち。工藤さんは手短かに自分たちの構想を語ってくれた。今後、漁業を再生するには、若いやる気のある漁業者が業種を越えて、共同していかないと駄目。それには、漁協、漁業権の問題など多くのハードルがある。それを越えて行かないと…いや必ずやりますよ。工藤さんの口調に力が入る。「ちょっと待って。中国語に訳しますから…。」ちなみに、河合さんや神戸の有志で、今年冬に収穫が見込まれる牡蠣の先物買いをして支援しようと広く呼び掛けている。



焼き肉を囲んで番屋グループと懇談

後は懇談会でということで、登米に向かう。番屋グループの面々と焼き肉を囲んでの懇談。とにかく、皆元気やなー。あるメンバーは言う。「そう、復興は明るく、楽しんでやらないと」普段なじみの少ない海の話などで時間の経つのも忘れるくらいだ。最後に、台湾の廖さん、野田の河合さんから記念品を手渡す。



工藤さんにかえるを手渡す廖さん

皆さん、有難う。夜も更けたので、民宿へ戻ります。

「民間のやる気で復興を」…女川町復興連絡協議会 7月22日 女川町

登米の民宿を出発して、南三陸町の仮庁舎に寄った後、女川町へ向かう。女川は町の中心部が壊滅状態となり、人口約1万人のおよそ1割に当たる町民が死亡、行方不明となった。これは、被災自治体の中で最も厳しい比率だ。また、女川原発が市街地から少し離れたところに立地する。中越の被災地市民交流会メンバーである福留さんが、女川の復興計画委員会の検討委員になったことから、女川にも縁ができ、今回訪問させていただくことになった。

訪ねた先は、女川町復興連絡協議会（会長・高橋正典女川町商工会長）。災害から1カ月余り、町商工会や水産業、観光業の団体などが、復興まちづくりを担っていこうと立ち上げたものだ。同町出身の俳優・歌手の中村雅俊さんも参加してくれたという。

私たちが着いたところは、工事現場事務所のような事務局。その2階に案内され、高橋会長をはじめ協議会メンバーとの懇談が始まる。協議会では、「復興市」の開催など様々な復興支援を行う一方、商業、水産など5つの委員会を設置、独自の復興策も練っている。「若いやる気のある人達が集まって活動し、行政にも提案していきたい。」「国の対応は遅い、民間がカバーする必要がある。」「女川町は原発

交付金があって財政は比較的豊かだが、将来的には原発に頼らないまちづくりのビジョンが必要。」「横転したビルを災害のメモリアルとして保存をしたい」と次々と抱負が述べられる。実行力あるメンバーが集うこの協議会は、行政も無視できないパートナーになっていることがうかがえる。

懇談の後、協議会メンバーの一人が私たちに案内してくださった。今後のまちづくりを考えるための女川町全体模型（ジオラマ）を見学、商工会青年部などの尽力で開設されたコンテナ村商店街を訪ね、そして7月1日震災後初水揚げのあった女川港へ赴く。ごく僅かでも確実に復興に向かって歩みだしている姿を見ることができた。

この後は、福留さんの案内でつぶさに町内を見て回る。奥深く津波が駆け上がった狭い谷間の市街地。その先に建設された仮設住宅。続いて、スポーツ施設など公共施設が建設されている高台へ上がる。原発交付金のお陰で1万人の町には大変豪華な施設が並ぶ。復興構想で高台移転の候補地になっているところだ。最後に港を見下ろす高台の病院から市の中心部を望む。メモリアルとして保存したいという横転したビルが3つほど転がっていた。



女川町復興連絡協議会の方々



岸壁を応急的にかさ上げ、水揚げ開始。



病院の高台から望む。横転したビルが見える。

被害の大きさとともに、復興へのエネルギーも感じられる女川であった。

「これを機会に縁づくりを」…松島町 7月23日 松島町

台湾・日月潭のチャリティ乗船券の義援金を松島町に手渡すため、朝一番に松島町役場へ。このチャリティの話が持ち上がった時、どこに寄付をすればいいか相談があった。松島がどうだろうか。日月潭も松島もともに国を代表する観光地だ。水面の形や風景もよく似ている。また以前、阪神・淡路大震災のボランティアとして、たかとりに来たことのある宮城県庁の西村さんが松島町の副町長に赴任している。その縁で、東日本大震災以来、神田神父は松島町とコンタクトを取っていた。日月潭から松島町へ。話は一気に決まった。

松島町長、観光協会長、そして前西村副町長（この時点では宮城県教育庁）らが私たちを迎えてくださった。出席者の紹介の後、早速廖さんから町長へ義援金が渡された。また、紙教堂で台湾の人たちが東北の復興を願って書いた短冊を綴った冊子も手渡された。そこには一枚一枚、手書きで復興を祈る言葉が書かれている。

「本当に有難うございます。松島は多くの小島に護られて、周辺地域のような大きな津波は避けられましたが、あちこちでいろいろな被害を受けました。このお金を観光地の復興に使わせていただきます」と町長。観光船も就航を再開したが、観光客は戻ってこないという。現在、旅館などは復興関係者の利用が多い。私たちの宿泊した旅館・絶景の館にも某市環境局の応援部隊が投宿していた。復興需要が終わるころには、新しい松島の再生をしたいと、町長は将来を見据えながら語った。



よく似た景観。上が松島、下が日月潭。



マスコットかえるを胸に町長（中央）観光協会会長（左）と廖さん

日月潭を訪れたことのある観光協会会長は、台湾の人たちにぜひ来てほしいと期待する。実は、松島を訪れる外国人観光客のトップは台湾なのだ。松島町は、震災以前から台湾に関心があり、日月潭との交流も話題になっていた。町長は、「これを機会にぜひ縁をつくっていきたいですね」と投げかける。廖さんも、「手始めに、松島の資料コーナーのようなものを考えてみましょう」と提案を返した。

庁舎を辞して、西村さんの案内で瑞巖寺をはじめ松島の観光ポイントを訪れる。歴史の奥深さが印象的だ。日月潭にも重層した歴史が秘められている。就航再開した観光船に乗る。自然の美しさに、しばし被災地であることを忘れる。たくさんのカモメが餌を求めて船の周りに群がってくる。「日月潭にはカモメはいないなー（日月潭沒有海鷗啊!）」



日月潭にカモメは？

「今日は、一つサプライズがある」…青池監督を訪ねて 7月23日 石巻市

松島を後にする。野田北部に密着してドキュメンタリー映画を作成した、ご存じ青池監督を訪ねるため石巻へ向かう。青池監督は、東日本大震災の復興の足取りを記録するため、すでに石巻市に拠点を構え撮影に入ったところだ。途中、東松島町の被災状況を見た後、石巻駅前で監督と落ち合う。監督は、街の復興のために活動している市民や学生との懇談の場を用意してくださっていた。

商店街の中にある「石巻街中支援基地ほーぷす」へ向かう。ここはもともと石巻のTMO「街づくりまんぼう」（社長西條允敏）と石巻専修大学が産学連携で立ち上げたアンテナショップだったが、震災後は街の復興のための拠点にしている。「株式会社街づくりまんぼう」は地元出身の漫画家石ノ森章太郎を記念する石ノ森萬画館を運営するとともに、まんがによる町おこし活動を展開してきた。



正面左の西條さんと右の青池監督

西條社長の歓迎あいさつの後、私たちも含め、出席メンバーの自己紹介と簡単なスピーチへ。料理店経営のおかみさんの体験話。まちづくり支援に来ている東京工大真野研究室の学生が制作した震災後の町のマップを紹介

してくれる。今日同行してくれた西村課長も挨拶。一渡り話が終わったところで、青池監督が、「今日は時間が限られているが、今後のきっかけになれば」と締めくくった。

この後、監督の案内で被災地へ。「今日は、一つサプライズがある」という監督の言葉を背にマイクロバスに乗り込む。まずは、旧北上川の中瀬にある萬画館と旧ハリスト正教会。流されていないが大きな被害を受けた。



石ノ森萬画館。津波で泥に覆われた。

続いて撮影の舞台の一つとなる門脇小学校へ。校舎は黒く焼け焦げている。津波は学校の前面のまちを飲み込んで、学校の1階へなだれ込んだ。校庭に積み上がった瓦礫から火災がおり、3階まで火が回った。生徒は校舎裏の方へ避難して無事だったが、親が迎えに来て帰宅した数人が亡くなったという。今回の撮影テーマは、「宮城からの報告～子ども・学校・地域」を予定している。子供たちに寄り添って撮影したいという監督の作品を心待ちにしたい。



黒こげになった門脇小学校のまえ。青池監督。

最後に、避難所になっている湊小学校へ。どうやらここがサプライズらしい。運動場の向こうにある4階建の校舎が避難所で、その入り口付近に小さなテントが見える。近づいて行くと「神戸チーム」との張り紙があり、一人の女性が出てきた。「あ、金田真須美さんやないか。」金田真須美さんは、知る人ぞ知る、阪神大震災の時も困難を抱える地区に支援に入っていたボランティア（すたあと長田）。「これがサプライズやったんや」



「私は一番困難なところを支援したい」と金田さん

廖さんも彼女の活動に大いに興味があるようだ。次々と質問をぶつける。「マスコミは行きやすいところを報道する。私は一番困難なところを支援したいんや」「困難なところを探すのは簡単。最初行ったところここより大変なところはどこ、と聞いたらええ。次へ行ったら又同じことを聞くと辿りつける」話は尽きない。

予定時間以上に、避難所にお邪魔した。暗くなった中、バスに乗り込み宿舎へ戻った。